

日本説話索引 全七巻

◎第()巻を申し込みます()冊
◎全七巻を申し込みます()セット

ご住所 〒

お名前

TEL

日本説話索引 全七巻

説話と説話文学の会編 ◆ ISBN978-4-7924-1459-7 C3591 (第一巻)



◎B5判・上製本・貼函入 総1,100ページ
定価 本体 **22,000**円+税

第二巻以降順次刊行予定

【編集委員】

池田敬子	朝比奈英夫
出雲路修	柴田芳成
田村憲治	白井伊津子
芳賀紀雄	中寫容子
森眞理子	橋本正俊
山本登朗	森田貴之

古代から中世の文学・歴史・仏教・辞書など167の文献から話を抽出、人・土地・書物・経文・詩歌・一般事項などの見出し語に40万項の要約文をも掲げ、「引く」索引であると同時に「読む」索引。

清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内2丁目8番5号
電話：06(6211)6265 FAX 06(6211)6492
ホームページ：http://www.seibundo-pb.co.jp
メール：seibundo@triton.ocn.ne.jp

お取り扱い

清文堂出版

〒542-0082
大阪市中央区島之内
2丁目8番5号
電話 06(6211)6265
FAX 06(6211)6492
http://www.
seibundo-pb.co.jp

日本説話索引 全七卷

説話と説話文学の会編 ◆ 第一卷 好評配本中

清文堂



説話と説話文学の会編

日本説話索引

第一卷
あゝかか

いざ、説話の森に!

40万の説話の概要が《読める》索引、待望の刊行

清文堂

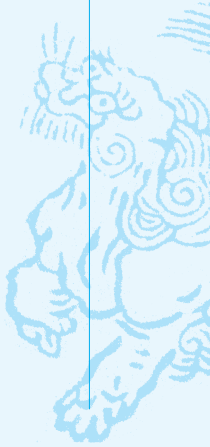
日本説話索引

第一卷
あゝかか

167の文献から
40万項の要約文を掲げ
「引く」索引と同時に
「読む」索引の刊行

清文堂

刊行にあたって



『日本説話索引』が、ようやく刊行されることになった。手元の記録によれば、出版準備が始まったのは昭和五十五年（一九八〇）。それから実に四十年が経過している。

当初四年後に予定されていた刊行がここまで延引したのは、採録と編集を依頼されたメンバーが、いささか過剰なほど大きな意欲を持ち、対象作品を最大限まで増やしたところによるところが大きい。採録対象の作品は、おおよそ室町時代を下限とする総計百六十七点。原則として翻刻されたものを対象にしたが、注釈のないものも多く、計画するのは簡単だったが、実際に取り組んでみると予想を超えて膨大な時間が必要だったのである。

多くの人々にさまざまな形で助けられながら、採録は粘り強く続けられた。専用のカードに要旨などを手書きで書き入れるという、現在からは考えられない素朴な方法で集められた原稿カードは、五十音順に整理され、専用のケースに入れられて保存、整理されながら少しずつその数を増やし、最終的には専用ケース百七十箱にまで至った。

その後、若い世代にも新しくメンバーに加わってもらい、採録もパソコンを使って行われるようになり、集積した原稿もデータ化されて、ようやく採録は最終段階に近づいていった。最終的に採録されたカード数（説話要旨の総計）は、四十万項を越えている。

データの量が膨大で、また作業が長期間に及んだため、方針変更

の徹底や全体にわたる点検などは、力を尽くしたにもかかわらず、完璧に行うことが困難であった。さまざまな問題点がなお残されていることも予想されるが、どうかご容赦の上、今後の改訂のために情報をお寄せいただきたい。

この『日本説話索引』は、「説話」の概念を広く捉え、さまざまな性格の「説話」をできるだけ多く採録したところに特徴を有する。また、単にその語の所在を示す索引ではなく、その「説話」の要旨を掲載して、「読める索引」を目指している。長い時間をかけてようやく完成した本書が、多くの人々に利用され、さまざまな形でお役に立つことを、編者一同、心より願うものである。

最後に、これまでご助力いただいた多くの皆様に、そして、四十年間この企画を見捨てることなく、常に我々を支え続けてくださった清文堂出版前田博雄氏に、心より御礼申し上げます。とりわけ、同社の担当として長らくご尽力いただきながら刊行を見ることがなく他界された故前田保雄氏に心からの謝意を表するとともに、すでに世を去った編集委員・故田村憲治氏および故芳賀紀雄氏にも今回の刊行を報告して、ご冥福をお祈りするものである。

二〇二〇年四月

説話と説話文学の会

池田敬子 出雲路修 田村憲治 芳賀紀雄 森真理子 山本登朗
朝比奈英夫 柴田芳成 白井伊津子 中嶋容子 橋本正俊 森田貴之

時空とわおぐ、伝承の海

荒木 浩 国際日本文化研究センター教授

この索引には「愛」があり、目覚めて悟る「朝」もある。

譬喩ではない。第一巻を繰れば、すぐに会おう項目だ。巨大な説話インデックスを彩る、実り豊かな枝葉である。

骨格は、歴史ある大木で『日本説話文学索引』という。一九四三年に、日本出版社から刊行された。昭和の初めに、国文学者石山徹郎と風巻景次郎の指導のもと、大阪府女子専門学校の学生六人が、日本説話文学研究の一環として作成した、大量のカードが発端という。戦後の一九六四年に清文堂が復刊し、十年後の一九七四年、増補改訂版が世に出る。今でも私が愛用する縮刷版は、その二年後、一九七六年の出版である。

そのころから説話研究は、空前の活況を呈するようになる。研究の方法や資料の発掘も飛躍的に進展した。国語学者の大塚光信氏より『日本説話文学索引』の根本的大改訂が提案され、「説話と説話文学の会」が作業を開始するのは、一九八〇年のことだ。

説話索引改訂の経緯と進捗については、かねてより関心があった。阪神淡路大震災後の一九九七年、国文学研究資料館研究情報部の助教授を併任した私は、「説話データベース化に関する研究開発会議」という共同研究を組織し、メンバーの一人に田村憲治

氏を招いた。田村氏によれば、すでにカードは三〇万枚に及び、構想の九割方は達成した、という。当時、京都の光華女子大学にお勤めだった山本登朗氏の眺めのよい研究室を訪問し、カードの实物を拝見したことも、今では懐かしい思い出である。

同年十二月、共同研究の成果報告を行い、翌一九九八年十月に『第3回シンポジウムコンピュータ国文学講演集』（国文学研究資料館）所収の一篇として活字化した。

あれからもう、二〇年以上の時が経つ。そして昨年、二〇一九年六月下旬のこと。早稲田大学で開催されたシンポジウムの懇親会で山本氏と同席し、ついに完成版が出るよ、と聞いた。文字通り、驚喜の僥倖である。

時代を跨ぎ、書名から「文学」の縛りもとれた。説話の海は、より大きなコンテクストへと解放されて、ようやく全貌が姿を現す。紙面の随所に、めくるめく説話要素がちりばめられ、膨大な典拠文献への指示を付して、知の編み目へと連鎖を誘う。

これは、通読してみるしかない。かつての学者たちが、群書類従の読破に挑んで、学問の根幹を築いたように。そして、無限の発想の源として。

研究が変わる、教室が変わる―― 『日本説話索引』の拓く新時代――

佐伯真一 青山学院大学文学部日本文学教授

待ちに待った『日本説話索引』がついに刊行される。こんなに待望した書物はない。私は学生時代からずっと『日本説話文学索引』（以下「旧索引」）のお世話になってきた。自分で持っているのは増補改訂版の縮刷版だが、あの小さな本はどんなに大きな事典よりも役に立った。類話探しは説話研究の基本中の基本である。文字列の検索はパソコンで容易にできるようになったが、固有名詞でも固定的な文字列でもない、たとえば「占い」「嫉妬」などというテーマに関わる説話を探そうとすれば、まずはこの旧索引に頼るしかない。また、現在の大学に勤めるようになってからは、日本文学科の一年生に、旧索引を引いて類話を調べるといふ課題を毎年のように課してきた。これは学生たちにとっても興味深いようで、四年生になってから「一年生の時にやった、あの調査が面白かったので、その延長で卒論を書きたい」という学生がしばしば現れる。

だが、旧索引は一九四三年初版。今となつては採録作品の底本が古いのはしかたない。また、採録作品は説話集が中心で、それ以外は少なかった。ところが、この新しい『日本説話索引』は、採録作品数を単純に数えても旧索引の約四倍、『太平記』も『北野天神縁起』も『古今序聞書三流抄』も『和漢朗詠集永濟注』も『冷

泉家流伊勢物語抄』も『法華経直談抄』も文明本『節用集』も『藻塩草』も入っている。底本も一新され、現在最も使いやすく信頼できるテキストが選ばれている。そして何より驚嘆するのは見出し語の豊かさである。第一巻の冒頭を見ると、「ア」のつく項目は、「阿（地名）」「唾」「阿」「嗚呼」「阿夷」「藍」「愛」「あいうつない」「相生」……と続く。「秋鹿郡」から始まっていた旧索引とは次元が違ふと言わざるを得ない。

単に説話の所在を示す索引ではなく、一つ一つの項目がそれぞれの説話の要点を的確に示してくれるので、索引を読んでいるだけで「こんな話もあるのか」「こういう話が多いのか」と、日本文化のさまざまな断面が見えてくる。そうした経験を、誰でも、いとも簡単にできるようになったわけである。全七冊に及ぶ、この巨大な索引が、これから文学や文化史・宗教史・思想史など人文科学諸分野の研究を、そして学生たちの学び方を大きく変えてゆくことは疑いない。私も新時代の尻尾ぐらいいにはついてゆきたいものである。

ファンタジーの源へ

松村栄子 小説家

美容院へ行くと、担当の若いひとがやたら気を使って話しかけてくれます。先日、休みには何をしていたか聞かれたのでお能を見ていたと答えたところ、一瞬手を止めて、それは難しそうですねと困ったように笑いました。

たしかに最初は取っつきにくいかもしれないけれど、お能の筋は決して難しいものではありません。最近見た『羽衣』などは、誰でも知っている〈天あまの羽衣はしつゝも〉のお話です。けれど、そう言うわたしを若い美容師さんはきよとんと見つめるばかり。いや、だから三保の松原で天女が水浴びしていたら……。

結局、お能についてではなく〈天の羽衣〉から語らねばならなくなり、ほんとうにびっくりしました。今の若いひとにとつて羽衣伝説は知っていて当たり前のお話ではないようです。

なるほど現代にはドラえもんやプリキュアやら新しいお話やキャラクターが溢れています。昔話などなくてもこと足りるのかもしれない。しかし、そうした新しい物語を生み出すひととの想像／創造の元になるのは、記憶の深いところにしまわれている古い物語群だという気がします。羽衣伝説から着想されたアニメやコミック作品はいくつもあるのです。

お能の『羽衣』を書いたのは誰なのか今のところわかっていませんが、作者がどのような伝承（説話）を元に創作したのかは、

この『日本説話索引』を引くとよくわかります。各地にさまざまな羽衣伝説があったこと、羽衣を失った天女が見る見る衰えてゆく〈天人てんにん五衰ごすい〉の様、極楽に啼く〈迦陵頻伽かりようびんが〉という鳥、衣を取り返した天女が欣喜して舞う〈霓裳羽衣の曲げいしよううい〉。また、彼女ら〈白衣黒衣の天人びやくくろい〉によつてもたらされる月の満ち欠けの秘密、などなど。そうしたモチーフの出所を本書は指し示してくれるのです。

さらにこの天女と漁師がそのまま織女しよくじよと牽牛けんぎゆうに置き換えられた伝承もあり、七夕伝説とも関連していることは初めて知りました。日本人の持つファンタジックなイメージの重層性に引き込まれ、索引なのについて読みふけてしまいます。

為政者がまとめた史書や地誌、個人の日記や物語集といった古典籍には、こうした古い説話が豊富に詰まっています。それは時を超えて受け継がれる日本人の精神的な宝に違いありません。親から子へ孫へと語り継がれる経路が断たれつつある今、本書はファンタジーの源を探る者にとつて、まさに〈宝の地図〉と言えるでしょう。



近世日本文学研究の 基盤となる『日本説話索引』

ローレンス・マルソー

立命館大学アート・リサーチセンター客員協力研究員

近世期の日本文学は、当然ながら中世期の文学の肩に乗ってできている。私はこれまで、近世中期の「文人」という、幕藩体制下における公職を退き、高度な教養を生かして多方面の文芸活動に集中していた「自由人」を研究してきた。この立場から『日本説話索引』の価値について述べたいと思う。近世に入って初めて、上流階級以外の人たちが書物などを通じて古典の教養を享受できるようになり、それまでの文芸を受け継ぎ発展させてきた。韻文では、漢詩・和歌・連歌・俳諧・川柳などを新しく発展させ、時代に合った表現を築いてきた。散文では、仮名草子・浮世草子・読本・戯作などの物語小説のみならず、随筆・紀行・地誌・往來物などのノンフィクションも様々な新しいジャンルを生み出している。そして劇文学では、能・狂言から人形浄瑠璃・歌舞伎まで、多様な文芸形態が現れている。舌耕文芸の講談・落語も語られるようになり、幅広く普及した。これらの文芸は、そのすべてが「説話」から題材を取り、「説話」をベースとして発展してきたと言える。

私は一九八二年秋に『増補改訂 日本説話文学索引』を購入して以来、四〇年近く座右の書として愛用してきた。「こういう概念

にどんな説話があるのだろうか」と思いながら調べると、必ず驚くような事柄に遭遇し、その都度研究のヒントを得てきた。例えば「懐妊」について調べると、一ページ近くの説話が紹介されている。恵心（源信）の母、神功皇后、玉依日売等の説話から「懐妊」の諸相が分かった（つもりだった）。しかし、新版『日本説話索引』の「懐妊」の項を読むと、何と二倍以上の説話が紹介され、近世文学の作者や読者がどれほどの伝統の上に立っているのか、よく分かるようになる。編集・執筆に当たった「説話と説話文学の会」の情報によると、説話の用例が四〇万項を越えているそうである。しかも、量的に増えているだけでなく、説話の概念自体を広く解釈している。いわゆる「説話集」からの採録に留まらず、史書、和歌、物語、漢詩文など、様々の説話性を有する資料から採録した、画期的な索引になっている。天文学を譬喩とすれば、地上の望遠鏡で天体観測をしていたときと比べ何百倍もの精密性を持っているハッブル宇宙望遠鏡で天体観測をする程の差が現れていると言える。

海外の研究機関に勤めている多くの学者は、その国や地域の言語で論文を書き、発表している。彼らは自分の大学、あるいは近くの日本研究プログラムがある大学の図書館を利用し、研究している。限られた資料の環境で研究を続けることは困難が伴う。『日本説話索引』という、膨大な数の説話を項目ごとに提供してくれる本書の存在は、大いに役に立つ素晴らしいものであり、学部学生から数十年の経歴を持つ研究者まで、日本研究、または比較文学研究に興味を持つ人にとって、不可欠の貴重な参考資料になることは言うまでもない。

▽——道三郎、曾我への道すがら富士野に松明多きを見、曾我兄弟の事起こせしをみる(曾我二〇・377)▽文持ちたる使い後より急ぎ来るに、問いて——道三郎、曾我兄弟の祐経を討ちしを知る(曾我二〇・378)▽——道三郎、祐成は討死し、時政は生捕られしを知る(曾我二〇・378)▽——道三郎に会いし使いは黄瀬川の亀鶴が姉の大磯の虎へ告ぐる使いなり(曾我二〇・378)▽——道三郎、曾我兄弟の本意をとげしを喜び、形見を届けし後高野山にのぼり出家す(曾我二〇・379)

鬼丸おにまる▽鬼王おにおう

鬼窟おにくわ▽瘡かさ

鬼形おにがた▽定患、多武峯の麓、軽寺の南に元明天皇の松前陵を定め、石の——をめぐらす(今昔三・三五・五35)

鬼神おにがみ▽——は横様の非道の道をば行かず、ただ直しき道理の道を行く(今昔三・三四・50)

鬼狩おにかり▽頼直、資永に頼まれ、小勢にて義仲方の高山党と奮戦す、胡人の虎狩、縛多王の——のごとし(源平三・56)

鬼切おにぎり▽——とは、元は清和源氏の先祖撰津守頼光の太刀なり(太平三・五4)▽頼朝の太刀、多田満仲が手に渡りて信濃国戸藏山にて鬼を切りたる事あり、これよりその名を——という(太平三・五57)

鬼栗毛おにりげ▽重能の子重忠、義仲追討の宇治川渡に、青地錦の直垂に、赤威の鎧着て、——と云馬に、巴摺たる具鞍置きて乗る(源平三・58)▽重忠の——、天馬の駒とはやるも、宇治川合戦に行親に射られ、弱れば、重忠、馬の前足取り妻手の肩に懸て水にくぐる(源平三・59)▽宇治川合戦に行親、十四束の矢以て重忠を射るに、重忠の乗馬——の吹荒を射通す(源平三・59)

鬼九郎おにくわ▽公相、天王寺にて渡辺の者なる——つかむを召し具すに、名の由来の尾籠なるを聞きて追い出す(沙石八・五・350)

鬼武おにぶ▽頼朝、大鹿毛なる馬に乗り、舍人——の

鬼殿おにだん▽三条東洞院の松の木の下に雨を避けて馬をひかえてありし男、雷に殺され、霊となり、その地を去らず、その所を——という(今昔三・二四・480)▽二条富小路殿、主なき院となり、いつしか怪しかる物住みつきて、——はかくやありけんと思ろし(増鏡二・54)

鬼取寺おにとりでら▽葛木山北峰の宿に、青谷寺・中山寺・信貴山・往生院・下津村・髮切・生馬・——・田原・石船などあり(諸山三・129)

鬼おにに神とらるおににかみ▽大和国の狐師、鬼を殺して、捕えられたる神女を助け、後に共に三輪神社の神となりしより、——と云う(袖中九・148)

鬼にかみ取らるおににかみ▽諺に——と云うは、伊勢国菟芸郡の狐師の故事を言う(童蒙七・270)

鬼おにのしこ草おにのしこくさ▽隆源、源俊頼に——とは何草ぞと問われ、知らずと答う(袖中二・17)▽隆原、源俊頼が——とは何ぞと問いしにつき、万葉集の鬼のしこ草の誤写されしを見たるにやと人に語る(袖中二・17)▽——とは、紫苑を植えて親を忘れじとせし弟の志に感ぜし鬼、その草を取りて腰にはさむにより名付くとの説あり(袖中二・18)▽万葉集の「鬼のしこ草」を、散木奇歌集「真熊野」に歌俊頼髓脳引用の万葉歌に「——とするは、俊頼の心得違いかと隆源いう(散木顕昭四・531)

鬼おにのしこ草おにのしこくさ▽亡父を恚いて紫苑を植えし弟に、鬼、父の屍をまもる由を告げしにより、紫苑を——という(青葉丹花四・175)▽紫苑を——という(俊頼157)▽わすれ草とは萱草、——とは蘭を言う(綺語下・115)▽忘れ草は萱草、——は紫苑なりとも言えど、本草には忘れ草と忍ぶ草は同じ物なりとす(奥義中・294)▽隆源、源俊頼が鬼のしこ草とは何ぞと問いしにつき、万葉集の——の誤写されしを見たるにやと人に語る(袖中二・17)

▽奥義抄に、忘れ草は萱草、——は紫苑なりとも言えど、本草には忘れ草と忍ぶ草は同じ物なりとす、とあり(袖中二・18)▽綺語抄に、わすれ草と

は萱草、——とは蘭を言うとあり(袖中二・18)▽膽西、説法に——の語を用う(袖中二・18)▽万葉集の——を、散木奇歌集「真熊野」に歌俊頼髓脳引用の万葉歌に「鬼のしこ草」とするは、俊頼の心得違いかと隆源いう(散木顕昭四・530)▽万葉集の——を膽西上人の説法に「鬼のよい草」と言えり(和歌色葉中・188)▽「萱草」歌中の句——の鬼は恐ろしおにの意、「しこ」とは凶の意なり(万葉仙覚三・148)▽——は、紫苑なり(詞林采葉八・117)▽わすれ草は萱草にて、——は蘭なりと綺語抄に言う(雑和下・194)▽膽西の説法には、——を鬼のよび草と云う(雑和下・195)

鬼おにの寝屋おにのねや▽能登国▽能登守通宗、海人らの献ずる——の鮑をあながちに責め取りたれば、海人ら越後国に去る(今昔三・二五・285)

鬼おにの間おにのま▽北野天神の託宣ありし時、——にて殿守司一人死に入り、後蘇生す(統古四九・369)▽殿上人の——にて物語する時台盤所の前の初紅葉一枝失せしと云う(十訓二・四上34)▽——の壁に白沢王を画かれしは、鬼の住むを鎮めし故という(著聞二・三六四309)▽一条天皇の作文の会に、敦道親王、襪きつく苦しきを、道長——にてぬがす(大鏡四・173)▽伊勢物語六段に国経等を鬼と云うは、内裏に——あるによる(知頭書三・144)▽伊勢物語六段に国経等を鬼と云うは、内裏に——あるによる(知頭書中・六・235)▽宮中の——は、先帝の具足を置きたれば人恐れて行かぬにより、その名あり(伊勢冷泉春・六・302)▽二条后を盗みし業平、宮中の——の、東向きの一の口に隠せしを、伊勢物語に「鬼ある所とも知らず」と云う(伊勢冷泉春・六・302)▽宮中の——、唐の白ただという絵師の鬼切りたる絵あるにより、その名あり(伊勢冷泉春・六・304)

鬼おにのよび草おにのよびくさ▽万葉集の「鬼のしこ草」を膽西上人の説法に「——と云う(散木顕昭四・532)▽膽西の説法には、鬼のしこ草を——と云う(雑和下・195)

大市^{おうち}團^{だいち}大和国^{やまと}▽垂仁天皇、探湯主の卜に、淳名城稚姫命の出するによりて、これに命じ、倭大神の神地を穴磯邑に定めて、——の長岡岬にて祠る(書紀^{しよき}垂仁^{すいじん}・三二二)

おうち^{おほち}(おほち)▽——を、厭わずと言う(能因^{のういん}・81)

大鈎^{おほこう}、跟踰鈎^{おほこう}、貧鈎^{おほこう}、痴駭鈎^{おほこう}、海神^{うみのかみ}、彦火火出見尊^{ひこひでみのみこと}に、兄に鈎を返す時に「——」と良いて後手に投ぐべしと教う(書紀^{しよき}・神代下^{かみよ}・176)

大近^{おほちか}團^{だちか}▽百足、景行天皇の命により、值嘉郷の島を視るに、八十余の内、二島に人あり。第二の島は——にて、土蜘蛛垂耳居る(肥前風^{ひぜんかぜ}・400)

大税^{おほち}から^{ちか}▽十年八月、三韓からの人々への調——免除の十年終了するも、帰化初年に共に来たりし子孫は課税を悉く免除すと詔す(書紀^{しよき}・天武^{てんむ}・三〇八・三四一)▽倭姫命、足速男命の見つけし稲を、竹連吉比古に抜穂に半分を抜かしめ、——に刈らしめ皇太神の御前に懸く(倭姫^{やひめ}・25)

大市首^{おほちのかみ}▽真野首弟子・新漢濟文、推古天皇二十一年に帰化せし百済の人味摩之に伎楽の舞を習いて伝う。これ、今の——・辟田首等の祖なり(書紀^{しよき}・推古^{すいこ}・三〇二・369)▽任那国の人、都怒賀阿羅斯止より出す(姓氏^{しんせい}・左京諸蕃下)

邑智里^{おほちのさと}の^{さと}團^{だち}掛保郡^{かほのぐん}▽——に駅家あり。——というは、応神天皇、巡行せし時吾は狭き地と思ししに、此は大内なるかもと云う故に、大内と号す(播磨風^{はりまかぜ}・290)

大千代君^{おほちよりのみこと}囚^{とら}大千世君^{おほちよりのみこと}↓道頼^{みちより}藤原^{ふじわら}大津^{おほつ}團^{だち}▽新皇将門、大井の津をみやこの——とす(今昔^{いまこき}・三二二・四364)

大津^{おほつ}團^{だち}近江国^{おみ}▽飛騨国は、もと美濃の内なり。昔——に王宮を造りし時、この郡より良き木を多く出して、馬の駄に負わせて来る(風逸^{ふういつ}・飛騨国^{ひし}・461)▽長保三年八月、長谷寺にて安勝の夢に貴女来り、先身は近江国——の浦の黒色の牛なり、という(長谷寺^{ながせじ}・下^{した}・253)▽近衛天皇の代、——の浦の俊成夫妻、長谷寺に参籠して子を祈るに、日輪、懐に入る夢を見、宿坊にて小字の観音経を

授かる(長谷寺^{ながせじ}・下^{した}・271)▽——の俊成の娘、長谷寺の観音の告げによりて京に上り宮仕えするに、左大臣経京に思われ、ゆゆしき者となる(長谷寺^{ながせじ}・下^{した}・272)▽大治頃、義親と称する者鴨院——等に現る(古事^{ここと}・四三三・下54)▽——に住む人、夢に関寺の牛を迦葉仏の化身なりと見る(古事^{ここと}・五三六下113)▽天武天皇、近江国——にて大友皇子と戦い山崎にて討つ(宇治^{うぢ}・五二・413)▽縁浄、——の葦毛馬の粟田口にて泥だらけになるを見て「しる馬は」の歌を詠む(著聞^{ちやくもん}・三〇七五・535)▽京より日吉社に百日詣する僧、八十余日目に——にて死人を担ぐも、巫に憑きし十禅師、許すと語る(私聚^{ししよ}・六三三)▽遁世の尼——を過る時車の輪一つあるを見て、一人は片輪有りと言い一人は片輪無しと言

う(沙石^{させき}・四一・173)▽或る説教師、——の海人の仏事に近江湖は天台大師の眼なりと云いて布施を多く得たり(沙石^{させき}・六六・266)▽相応入滅の日、——の人々叡南の方に瑞雲を見、伎楽の声を聞く(三國^{さんごく}・二九上64)▽行円、白山にて飛來せし鏡をもちて船に乗るに、帆を上げざれば順風吹き送り、櫓を置けども舟速かにて——浦に着く(三國^{さんごく}・四三上206)▽安勝の先身は、近江——浦の黒色の牛にて野飼に放たれ両足を損じ、棄てられしを、関寺の法華修行の僧、庵室に曳き入る(三國^{さんごく}・五三上288)▽観祐、竹生島に詣する途中、——辺の小家水没するを見て歌をよむ(俊頼^{しゆんり}・214)▽粟津野は近江にあり、——より南、勢多より北にて、湖よりこなたなり(後拾遺頭昭^{ごせいついとうしやう}・四・423)▽重衡の三井寺攻により、——の在家二千八百五十三字、焼失す(源平^{げんへい}・二六395)▽義仲、東を指て落ち、龍華越に北国へとも、長坂に懸り播磨へとも聞かるも、実は

——へ向う(源平^{げんへい}・三三870)▽重衡、関東へ下るに——浦・打出宿・粟津原を通り、勢多唐橋・野路宿・篠原堤・鳴橋を経て鏡山の梵の宿に着く(源平^{げんへい}・三三97)▽宗盛、関東下向に、会坂山を過ぎ、——打出浦、粟津原に着く(源平^{げんへい}・四三・111)▽六代時政に具せられて会坂山越え、——粟津原・勢田唐橋・野路篠原過ぎて鏡に着く(源平^{げんへい}・四三・117)

▽比良山の僧、飛鉢の法を行いて——の船の米俵を運ぶ(神仙^{せんぜん}・三二・273)▽——の男女、相応入滅の日伎楽の声を聞き奇雲を見る(拾往^{しよくわう}・下^{した}・359)▽神功皇后、務古水門にて卜すに、表筒男・中筒男・底筒男の軍神、吾和魂を——淳中倉長岡峽国に居らしむべし、往來の船を看んと曰う(住吉^{すけ}・90)▽日吉社行幸の時黒筒矢せて二十余年後に——辺にて求め出でたるに損せず(教訓^{きょうくん}・九・170)▽黒筒は、日吉行幸の時に失われ、二十余年後に——辺にて求め出さる(体源^{たいげん}・六・679)

大津^{おほつ}團^{だち}撰津国^{せんしゆ}▽二十二年四月、兄媛、——より発船す。応神天皇、高台にてその船を望み、「淡路島」の歌を詠む(書紀^{しよき}・心神^{しんじん}・三三四・489)▽三十年九月、仁徳天皇、皇后磐之媛命の船を待ち「難波人」と歌するに、皇后怒りて——に泊まらず、江を浜り倭に向かう(書紀^{しよき}・仁徳^{にんとく}・三〇九・46)

大津^{おほつ}團^{だち}和泉国^{わいせん}▽皇極天皇三年三月、休留、豊浦大臣の——の宅の倉にて子を産む(書紀^{しよき}・皇極^{すうごく}・三三・389)

大津^{おほつ}團^{だち}筑前国^{ちくぜん}▽唐に遣わされし坂合部連石布・津守連吉祥の二船、五年八月に筑紫の——の浦を出発し、石布の船は爾加委という島に漂着し、東漢長直阿利麻等五人、島民の船を盗み括州に至り、洛陽に至る、と伊吉連博徳書にあり(書紀^{しよき}・斉明^{せいめい}・五七・323)

大津^{おほつ}▽住吉^{すけ}撰津国^{せんしゆ}大津池^{おほつ}團^{だち}河内国^{かんな}▽天皇、太子の奏により、十月山城国栗隈に大溝を掘り、河内国に戸刈池・依網池——安宿池などを造らしむ(伝曆^{でんりき}・推古^{すいこ}・三二〇)

大津江^{おほつ}團^{だち}印南郡^{いなんぐん}▽神前村の荒ぶる神、舟を半ばで留めしに、往來の舟悉に——に留まり、川上に上り、賀意理多之谷より引き出で赤石郡の林の湖に出す(播磨風^{はりまかぜ}・262)

大塚^{おほつか}團^{だち}瑠璃^{るり}▽瑠璃、——の智者に天台宗の法門を尋ぬ(発心^{はつしん}・二〇・77)

大津越^{おほつ}▽季春、昆次郎大夫の——といひし刀にて弥太郎に首を切らる(古事^{ここと}・四三三・下56)

還遊かえりあ即興に、「よひのまに」と詠み、兼家より衣を賜わる(世継・七五)〔栄花・三上15〕返り坂かえりあり、稲荷の——に、日を拝みて涙を流す僧あり、閑居・上・二七、108

還立かえり立ち上り▽石清水八幡の臨時祭の舞人して——の日、朱雀院に着す。藤原師実以下、皆破子を献す。源俊房・顕房も仰せあり(富家六・39)▽賀茂臨時祭に参入せる公卿の、——の御神楽に装束を改めて参るは見苦しき事なり(富家一〇六、410)

返忠かえりちかえり▽満仲、相撲のうらみより敏延を失わんとし高明をも讒言す(源平一六・380)▽敏延、連茂、満仲、千晴ら、右近馬場にて為平親王即位の談義をするに、満仲、——す(源平一六・380)▽項羽、范増が沛公と密議を謀って——をなすと疑い、范増が権を奪いて誅せんと計る(太平二六・431)▽釈氏の大匠一人、寄手に「釈氏の利利種は五戒を持ちたる故に人を殺す事をせず、ただ寄せよ」と——す(太平一三・236)▽摩羯魚は瑠璃太子の兵どもと、漁夫は釈氏の利利種と、多舌魚は今——の大臣と生を替り(太平一三・238)

還殿上かえりかえり上り▽清正、紀伊守に任せられて後、——を願う「天つ風」の歌を思見に代作せしむ(袋・上・46)かえるかえり「われが身は」歌の——は、毛の代わるをいふと顯昭言(藻塩二〇・26、182)

蛙かえり蛙かえり▽蝦蟆・蝦▽国標は為人淳朴にて、山の菓を取り食ひ、また——を上味とす、毛瀧と呼ぶ(書紀・応神一・九〇・486)▽鯛女、——を救わん為に蛇の妻となることを約するも、放生せし蟹に助けらる(靈異中八・130)▽山背国の紀伊郡の女、蛇に飲まれんとせし——を助け、放ちし蟹の報恩と行基の教えにより蛇の難を逃る(靈異中・三・137)▽——を救わんがために蛇の妻とならんとせし鯛女、行基より三婦五戒を受けて放生せし蟹に救わる(三宝中・三・175)▽山城国久世郡の翁、蛇に飲まれんとせし——を助けんとし、蛇を蟹とするを約束す(法華下・三・三)▽——を助けし父の言によりて蛇に嫁がせんとせし女、かつて救いし蟹と観

音の加護とによりて難をまぬかる(今昔一六・六・354)▽広沢の寛明僧正の御房にて、晴明、草の葉をもちて——を殺す(今昔二四・四四〇)▽雉は鷹に取られ、——は蛇に吞まる(宝物二・15)▽釈迦曰く、昔國王は——にて田にあり、羅漢は農夫にて鋤にて——の頭を切り、その業を償わんため殺さるるなり、と(宝物四・34)▽広沢の寛明僧正の御房にて、晴明、草の葉をもちて——を殺す(宇治二・三・310)▽久世郡の女、——を助けんが父の蛇を婿にせんとするに、観音と以前助けし蟹に救わる(著聞三〇・六・515)▽寛喜三年夏、高陽院の南大路の堀にて——数千集まり合戦す(著聞三〇・七・532)▽天下旱して飢えし時蛇、龜を使いとして——を招くに——偈を述べて行かざる事大智度論にあり(沙石五本六・216)▽有徳なる僧、資財を地頭に取られ、死して——となり取り殺さんとす(雑談六・212)▽貞崇の見し火雷神の姿は腰より下は——子の如し(真言五・302)▽勾踐、越に帰らんとするに、——多く車の前に飛び来りて、勇士を得て素懷を達すべき瑞相とて、車より下りて拜す(三國六二・上319)▽——を詠む時「かはづ」と言(喜撰二〇)▽「かはづ」とは、——を言

い、井手のあたりにも、苗代水にもあり(能因・74)▽——の異名を「かはづ」と言(俊頼・154)〔奥義・上・251〕▽節信、能因より長柄橋の鮑屑を見せられしに、井手の——の干物を見せ、互に感嘆す(袋・上・42)▽秘府本万葉集抄、「もずの草ぐき」を、郭公の沓手を出さざりし百舌鳥が、虫——等を郭公のため草の茎にさすを言(袖中一・22)▽かわずは井手の川のみならず、世の常の——とは異なれり(無名抄・286)▽良定、住吉の浦に忘れ草を尋ねて美女に逢い、来春を約せしに翌春その女見えず、——の跡「住吉」の歌をなすを見る(古今毘沙・序・5)▽貫之の先祖の紀良貞、住吉の浜にて女と後を契り、後に行くに——の足跡「住吉」の歌となる(日本紀にあり)〔雑和・上・66〕▽百舌鳥、郭公より沓の代を取りて沓を渡さざりしにより、はえにえとて、郭公のために草の

茎に虫や——を置く(雑和・下・220)▽延暦三年五月七日、遷都の相として、——三万難波より天王寺へ入る(水鏡・下・80)▽勾踐、越に帰る途次、水より躍り出でし——を敬う、奢れる者を賞する心なり(源平一七・432)▽沙門の前生は田夫、波羅奈國王の前生は——にて、田夫誤りて——の首を切る(太平一三・63)▽勾踐、越國へ帰る途中、多数の——の飛び来るを見「瑞相なり」と車より下りて拜す(太平一四・192)▽仏、農夫が——を切りし前生の因果報いて、大王上人を切れりと説く(曾我二・127)▽天然の大王の前生は——、上人の前生は農夫にて田をかえず時、唐鋤にて——の首を切る(曾我二・127)▽歌は神仏納受し慈悲を垂る、されば花に鳴く鶯、水にすむ——も歌をよむ(曾我五・224)▽勾踐、越に帰る途次、道端に——多く集り道をふさぐを見、瑞相なりとて拜す(曾我一・233)▽良定、住吉に忘草尋ねし時、——の通る跡を見れば「住吉」の歌あり、——の歌をよむ例なり(曾我一・240)▽花に鳴く鶯、水にすむ——は春を待ちて鳴き、草葉にすだく虫、遠山に鳴く鹿は、秋を得て声を出す(直談一・三・37)▽前世にて極好女に殺されし——、今竜神となりて、極好女を引き割る(直談三本・三・203)▽智顛、身は狗落の如し、口は春——の如し、心は風灯の如し、という、狗落はこまいぬなり(直談三本・二・278)▽性恵、池の——が鳥に取らるるを哀れむ(徒然上二・98)▽蝦蟇竜、——に似たり(塵四・三・281)

▽井の中の——のたとえ、莊子に見ゆ(塵六・三・64)▽門庭の草葉を剪らず、中に——の鳴くを、両部鼓吹なりと孔稚珪言(文明節用・利・198)▽田鼠とは——なり(文明節用・宇・475)▽鶉は——が化してなり、日本の鶉にはあらず(文明節用・宇・475)▽田舎の別屋の内に掛けたる棚にて蚕を飼うを「かい屋」という。棚の下に溝を掘る故に、水たまりて——鳴くという(藻塩六・六・114)▽もずは郭公の来る頃、もずのはやにえとて、草の茎に虫や——を刺して隠る(藻塩二〇・三・188)▽吉野の国栖は——なども食するにより、大蛇などの子孫

は——を刺して隠る(藻塩二〇・三・188)▽吉野の国栖は——なども食するにより、大蛇などの子孫

採録作品一覽

書名(略号)

1 古事記(記)

2 常陸国風土記(常陸風)

3 出雲国風土記(出雲風)

4 播磨国風土記(播磨風)

5 豊後国風土記(豊後風)

6 肥前国風土記(肥前風)

7 風土記逸文(風逸)

8 日本書紀(書紀)

9 続日本紀(続紀)

10 日本後紀(後紀)

11 続日本後紀(続後紀)

12 日本文徳天皇実録(文徳実録)

13 日本三代実録(三代実録)

14 古語拾遺(古語)

15 高橋氏文(高橋氏文)

16 先代旧事本紀(旧事)

17 新撰姓氏録(姓氏)

18 日本靈異記(靈異)

19 日本感靈録(感靈)

20 三宝絵(三宝)

21 大日本法華経験記(法華)

22 江談抄(水言鈔)(江談・水)

23 江談抄(神田本)(江談・神)

24 江談抄(前田本)(江談・前)

25 江談抄(群書類従本)(江談・類)

26 百座法談聞書抄(百座)

27 注好選(注好)

28 今昔物語集(今昔)

29 古本説話集(古本)

30 打聞集(打聞)

31 中外抄(中外)

32 富家語(富家)

33 世継物語(世継)

34 宝物集(宝物)

35 長谷寺験記(長谷寺)

36 発心集(発心)

37 古事談(古事)

38 続古事談(続古)

39 宇治拾遺物語(宇治)

40 閑居友(閑居)

41 今物語(今物)

42 十訓抄(十訓)

43 古今著聞集(著聞)

44 私聚百因縁集(私聚)

45 五常内義抄(五常)

46 撰集抄(撰集)

47 沙石集(沙石)

48 唐鏡(唐鏡)

49 雑談集(雑談)

50 内外因縁集(内外)

51 神道集(神道)

52 真言伝(真言)

53 吉野拾遺(吉野)

54 三国伝記(三国)

55 雑々集(雑々)

56 東齋随筆(東齋)

57 万葉集(万葉)

58 和歌作式(喜撰)

59 和歌式(孫姬)

60 石見女式(石見女)

61 能因歌枕(広本・略本)(能因)

62 俊頼髓脳(俊頼)

63 難後拾遺抄(難後拾)

64 綺語抄(綺語)

65 奥義抄(奥義)

66 袋草紙(袋)

67 和歌童蒙抄(童蒙)

68 袖中抄(袖中)

69 顕昭古今集序注(古今序顕昭)

70 顕昭古今集注(古今顕昭)

71 顕昭拾遺抄注(拾遺顕昭)

72 顕昭後拾遺抄注(後拾遺顕昭)

73 顕昭詞華集注(詞花顕昭)

74 顕昭五代勅撰(五代顕昭)

75 顕昭散木集注(散木顕昭)

76 西行上人談抄(西談)

77 古来風体抄(再撰本)(風体)

78 和歌色葉(和歌色葉)

79 無名抄(無名抄)

80 八雲御抄(八雲)

81 蒙求和歌(蒙求和歌)

82 万葉集註釈(仙覚)(万葉仙覚)

83 詞林采葉抄(詞林采葉)

- 84 青葉丹花抄 (青葉丹花)
 85 古今和歌集序聞書三流抄 (古今三流)
 86 古今和歌集頓阿序注 (古今頓阿)
 87 弘安十年古今集歌注 (古今弘安)
 88 古今和歌集灌頂口伝 (古今灌頂口伝)
 89 玉伝深秘卷 (玉伝)
 90 毘沙門堂本古今集注 (古今毘沙)
 91 和歌口伝 (和歌口伝)
 92 野守鏡 (野守)
 93 歌苑連署事書 (歌苑)
 94 為兼卿和歌抄 (為兼)
 95 和歌庭訓 (和歌庭訓)
 96 延慶兩卿訴陳狀 (延慶)
 97 悅目抄 (悅目)
 98 和歌無底抄 (無底)
 99 桐火桶 (桐火)
 100 愚秘抄 (愚秘)
 101 三五記 (三五)
 102 愚見抄 (愚見)
 103 和歌口伝抄 (口伝抄)
 104 玉伝抄和歌最頂 (玉伝最頂)
 105 深秘九章 (九章)
 106 阿古根浦口伝 (阿古根)
 107 雜和集 (雜和)
 108 和漢朗詠集永濟注 (朗詠永濟)
 109 大和物語 (大和)
 110 大鏡 (大鏡)
 111 栄花物語 (栄花)
 112 唐物語 (唐物)

- 113 今鏡 (今鏡)
 114 水鏡 (水鏡)
 115 和歌知頭集 (書陵部本) (知頭書)
 116 和歌知頭集 (島原文庫本) (知頭島)
 117 冷泉家流伊勢物語抄 (伊勢冷泉)
 118 紫明抄 (紫明)
 119 河海抄 (河海)
 120 平家物語 (平家)
 121 源平盛衰記 (源平)
 122 真名本曾我物語 (真曾我)
 123 太平記 (太平)
 124 増鏡 (増鏡)
 125 曾我物語 (曾我)
 126 藤氏家伝 (藤氏家伝)
 127 聖德太子伝曆 (伝曆)
 128 上宮聖德法王帝説 (帝説)
 129 日本往生極楽記 (往生)
 130 本朝神仙伝 (神仙)
 131 続本朝往生伝 (続往)
 132 拾遺往生伝 (拾往)
 133 後拾遺往生伝 (後往)
 134 三外往生伝 (三往)
 135 新修往生伝 (新往)
 136 高野山往生伝 (高往)
 137 念仏往生伝 (念往)
 138 倭姫命世記 (倭姫)
 139 住吉大社神代記 (住吉)
 140 元興寺伽藍縁起 (元興寺)
 141 信貴山縁起 (信貴山)

- 142 当麻曼荼羅縁起 (当麻)
 143 粉河寺縁起 (粉河)
 144 本浄山羽賀寺縁起 (羽賀)
 145 朝熊山縁起 (朝熊山)
 146 諸山縁起 (諸山)
 147 北野天神縁起 (北野)
 148 八幡愚童訓 (八幡甲)
 149 八幡愚童記 (八幡乙)
 150 日光山縁起 (日光)
 151 白山之記 (白山)
 152 六郷開山仁聞大菩薩本紀 (六郷)
 153 覚鑿上人打聞集 (覚鑿)
 154 妻鏡 (妻)
 155 夢中問答 (夢中)
 156 法華経直談抄 (直談)
 157 教訓抄 (教訓)
 158 文机談 (文机)
 159 体源抄 (体源)
 160 謡抄 (謡抄)
 161 海道記 (海道)
 162 東関紀行 (東関)
 163 徒然草 (徒然)
 164 塵袋 (塵)
 165 壺囊抄 (壺)
 166 文明本節用集 (文明節用)
 167 藻塩草 (藻塩)